

南方（その他）

パレンバン高射砲第一百連隊

終戦後はキャンプ勤務

鳥取県 畑 豊

私は大正十一年七月七日、鳥取県西伯郡淀江町大字淀江六二九番地で、農家の長男（妹一人）として生まれました。昭和十七年徴集兵とし、米子で兵隊検査を受け甲種合格、防空兵ということになりました。ところが入隊期変更となり、昭和十八年四月五日大阪の西第六国民学校集合の命令があり、そこで軍服に着替え、旅館に分宿したのです。

我々初年兵は三百名くらいでしょう、第十師団管区

の鳥取・岡山・兵庫出身者です。部隊は加古川の高射砲第三連隊だが、中支南京で防空第一百連隊となっていたが、七・五ミリの高射砲（船舶高射砲輸送船に乗る）をもって、ジャワ上陸作戦に参加した部隊でした。

軍歴履歴書（現地部隊長発行）によると、昭和十八年四月五日、現役兵とし大阪集合。同二十七日、大阪港出発。五月二日、湊浜出港、馬港要港・西貢（サイゴン）寄港。六月一日、昭南（シンガポール）出港。五日、パレンバン上陸。六日、防空百一連隊入隊、同日連隊本部に編入：とあります。

部隊は後に高射砲第一百連隊となり、パレンバン防衛司令部直轄で、通称号は「司」部隊から「富」部隊第二五軍に変更になりました。

初年兵教育は六月から三カ月間基本教育で、私は本

部要員としての業務もして、観測・監視・通信・無線と分業教育を受けるのです。教育期間中は初年兵だけの集合教育でしたが終了すれば古参兵のいる内務班に入ることになる。そのころ、東條陸軍大臣（参謀総長兼務）が視察に来られた。何しろ、黄色い将官旗が四本、自動車についているので、ビックリしたこと。を今でも記憶しています。

「油一滴血の一滴」といわれた当時のことです。「大東亜戦争は石油により始まり、石油により終わる」というほど、このパレンバンに在る石油部隊が最重要な任務を持っていたのです。それを守るのが、我が高射砲部隊でした。そのため、東條大将の検閲だったといわれていました。我々初年兵は前列、古参兵は後列、騎兵銃は三人に一人が持ち、通信、観測・監視班と検閲を受け、東條陸相の訓示を緊張のうちに受けました。あの、独特の声は今も残っていますし、パレンバン防衛隊の任務の重さも知らされました。

その当時、最新鋭の十二センチ高射砲六門が配備されたのです。弾丸は野戦重砲と同じようなもので、兼

莢を入れれば、我々の身長くらいの一五〇〜一六〇センチはありました。パレンバン防空戦闘配置図（畑氏は「丸」掲載の昭和二十年一月二十四日、第一次戦闘経過概要図を示しつつ説明）によると、高射砲第一〇一連隊の第一・二・三・四・五中隊は高射砲、第六中隊は和蘭の鹵獲兵器、第七・八・九中隊は防空隊。その前に前線監視隊があり、中央に連隊本部。鹵獲兵器操作隊員の中には現地人兵補（志願兵）が若干おりました。

敵機の目標とする製油所はムシ河河畔で支流コメリン河を挟んで東岸に第二、西岸に第一製油所がある。我が連隊は第一製油所の南と東に配備。高射砲第一〇三連隊は第二製油所警備。第一〇二連隊はムシ河北、防衛司令部周辺に位置されている。

我が連隊は、スマトラ派遣、富（第二五軍）第一〇三六七部隊・当初は防空第百一連隊として編成、昭和十二年兵（大正六年生）は善通寺（第十一師団）、姫路（第十）、広島（第五）の野砲その他を集め、中支の南京で防空隊になったといわれていました。

私は、通信（有線）で、五百メートルの被覆線を六人グループで、送信・受信・電話機と受け持ち、五百メートルごとに接続していくのです。なかなかの重作業ですが、これにより中隊と連隊本部との連絡をするわけです。他連隊間は無線ですが、敵やスパイにも傍受されるので、夜間、光の信号―暗号式の点滅で通信します。相手同志で光芒を合わせ、出す方と受ける方、高い所から低い方へ、高い所同志と。

終戦近くなるとスパイが曳光弾を揚げ、我が部隊の位置を敵に知らせていた。それは華僑が多かった（蒋介石軍とつながっている）が、逆にインドネシア人は協力的であった。インドネシア人には和蘭を倒して独立の目的があった。開戦時のパレンバン落下傘降下部隊には、インドネシア現地人が協力、和蘭兵の位置を知らせたり、攻撃をしたという。

私が勤務していた当初は製油所も活発に生産・精油をし、ムシ河からタンカーで内地へ輸送していました。これを防衛するため三個連隊の気球大隊が、製油所の周りを阻塞気球を揚げて囲んだ。この気球の目的は敵

機の来襲防止にあるが、それよりも、そこに存在することよっての脅威感を与える方がはるかに大きいといえます。だから策にひっかかって落ちるといいます。

空襲は当初は偵察に来ていたが、本格的になったのは昭和二十年一月からでした。連合軍の艦爆連合での攻撃です。先にB 29が偵察し、航空写真を撮っていたらしい。その前には、艦載機がインド洋方面から来たという情報がありました。

昭和二十年一月二十四日の空襲の状況について畑さんは郷土の戦争体験「戦雲、私の証言」の中で、次のような手記を記述されている。

「私は昭和十七年現役（防空兵）として南方スマトラ島パレンバンに現地入隊。「油の一滴は血の一滴」新しき日本の動脈といわれた石油源を死守せよと命ぜられたのが高射砲（七センチ砲）三個連隊である。その中の私の所属部隊に十二センチ砲六門が配置された。

この砲はわが国最新鋭の高射砲で、空の要塞B 29の初空襲で三機を落している。しかし二十年一月二十四日の戦爆連合の大空襲にはこの精鋭砲も量に負け製油所二カ所やられ、また隣の中隊では戦闘の激しさが砲の装填ミスを誘い砲身のさく裂、分隊全員が即死した。

私はそのさく裂音を本部隣地で聞き、駆けつけたが戦友の姿は見る事ができず陣内は散乱していた。幸いにも私は無事に生き延びて故郷の土を踏むことができたが、国のため尊い犠牲となった戦友たちをしのぶとき、三十年前のあの悲惨な状況は今でも脳裏に焼き付いて離れない」

このとき、応戦した我が連隊の高射砲は、鹵獲したピッカーズ砲を合わせると約四十門でありました。その集中砲火により、私の証言にあるごとく威力を發揮し、三機を撃墜したが、何しろ、敵機動部隊は戦爆合わせ百三、四十機であり、衆寡敵せず第一製油所は火災を起こしてしまいました。

従来の七センチ高射砲の有効射撃距離は五〜六キロ、高度六千メートルだったので装甲が厚く、超高空度飛行のB 29に対しては無効でした。しかし、十二センチ砲は高度約一万メートル、威力圏八〜十キロだから、連隊員のB 29に対する挑戦意欲はますます強くなり、三機撃墜の戦果を上げることができたのだと思います。

昭和二十年になると南方軍の戦況も悪化し、ビルマが危なくなり、インパール戦より撤退してきました。そのため、我が部隊も、馬來半島へ転進を命ぜられ、高射砲隊一個連隊は逆にビルマまで北上しました。

我々も、終戦直前の八月一日、バレンバン出港、六日昭南上陸、馬來鉄道北上、泰緬鉄道で前進中止の命令が下りました。無蓋貨車には高射砲、有蓋貨車には弾薬類や、紙幣も積んでいたが、八月十五日終戦の詔勅が下りました。そのため、馬來鉄道を南下しましたが、昭南へ着く途中、クアランプールで共産軍により線路が外され進めなくなりました。彼らは、砲をくれれば線路を継ぐと部隊長に言うので、高射砲の水平、○分角射撃をしようと「撃ちかた」の準備をした。

これで共産軍も退却した。私は本部なので、本部、第一中隊、照空中隊が第一挺団となりシンガポールを出た。第一〇一連隊は馬來へと移転命令が出て、第三挺団の後は終戦となり、再びパレンバンへということでした。何しろ移動中での終戦でしたから、第一、第二挺団が馬來半島の泰緬国境ークアランプールから南下、飛行場のあったクルアンまで来ましたら、英軍が昭南島に上陸したため、我が部隊はクルアン集結を連合軍より命ぜられました。

我々は、クルアンの第三キャンプに駐屯し、はからずも戦犯とか通過部隊の検問をさせられたのです。日本軍の我々が連合軍の命令で、日本軍将校を検問するという要員になったわけでした。高射砲第一〇一連隊の我々二十八人は復員する昭和二十一年六月まで、各方面から集結する部隊の誘導や検問をしていたのであります。

本隊はレンバン島、ガラン島に収容され、そこで自活生活のため漁労、タビオカ栽培をして生活したのです。レンバン島は初めは食糧の補給もほとんどなく、

野生植物を採って食べ、塩は海水から取り、マラリヤや栄養失調で苦しみ「恋飯島」ともいわれた所です。

私たち八人は第一〇一連隊の中から選ばれ思いがけず、運と申しますか、クルアン第三キャンプ隊長相川要左衛門大佐の配下となりました。食糧などは英軍の配給（携帯食糧にはミルク、ビスケット、缶詰、煙草などが入っており、英軍はいい物を食べているなど、思いました）を受けつつ、毎日、海軍だ、軍属だ、民間人と検問をしていました。検問でパスすればハワイトキャンプへ入り、戦犯容疑者や、情報関係者、憲兵とか、現地人の面通しでの容疑者はブラックキャンプ入りである。そこへ何日か入れられ、容疑が晴れると出されるのである。

検問班には警備隊から勤務者が出た。我々も十カ月も勤務したので相川隊長に交代させてもらうよう頼んだ。この第三キャンプの位置は、馬來半島東海岸、昭南島（シンガポール）より約八〇マイル（約一二九キロ）北部にある。先にも申しましたようにクルアン飛行場（九九式双発軽爆撃隊）に設置されていて、私は

相川大佐の伝令をしていました。周囲状況を申しますと、夜は虎の遠吠えが聞こえるので、襲われないように焚火をたいている。やはりマレーだなと思われる所でした。

昭和二十一年六月十五日、我々二二個部隊（海軍・軍属・邦人など）はシンガポールを出帆したのですが途中、台湾沖で台風に遭い一時バックし、六月二十七日ようやく大竹へ上陸することができました。二日間復員の手続をし、帰郷の距離に応じた食糧をもらい出発したのですが、その時間には山陰線の列車はないので岡山に二泊し帰宅しました。

思い出せば、パレンバン爆撃のときは、各中隊からの有線連絡は地下壕で通信勤務をしていました。製油所が燃えた時は防空隊本部におり、高射砲隊の所とも離れていたのので、直接被害を受けることなく済みました。通信隊は有線電話も無線も地下壕でしたので、地上の空襲状況を直接見ることはできません。しかし、爆発の震動は激しく、その惨状は膚や耳で感じていました。戦友は、砲中隊はと心配したとおり、地上の高

射砲隊はほとんどやられた。敵機は我が陣地や製油所などを偵察、その航空写真により正確に攻撃します。

なにしろ、B 29は高々度で飛行するので、夜間爆音はあっても、照空灯の光芒を三点合わせることはなかなか困難でした。敵機は上から爆弾を落すのだから防護は大変、それに一万メートルもの高度では、ほとんど撃墜することができなかつた。しかし、どこかの中隊が落したB 29には女性の通信士が乗っていたと聞いています。

帰還する前の昭和二十一年新春に、相川隊長から

「新玉の年を迎えて雄々しくも

修め固めよ永久の礎」

との墨痕鮮やかな一首を記念としていただき、今日も往時を偲んでおります。さらに、私は幸いにも生還できましたが、あのパレンバンで石油施設を守りつつ、空襲により多くの戦友を失ったことは永遠に忘れることはできず、御冥福を祈りつつ「永久の礎を修め固め」を誓っております。

【解 説】

一、パレンバン高射砲第百一連隊――

体験聴取証言者の畑氏は冒頭、戦記資料雑誌「丸」に掲載された「パレンバン防空隊の戦闘」について話された。その状況を南方燃料石油部隊隊資料によって解説をする。

一、パレンバン初空襲、昭和十九年八月十一日払暁、

パレン製油所は敵の初空襲を受けた。午前三時から七時まで約四回にわたり、延べ二〇機が、高度二千～三千メートルで来襲、爆弾四〇発、焼夷弾約百発を投下した。第一製油所K二〇番タンクが発火炎上したが翌十二日には消火し、被害は軽少であった。

二、パレンバン製油所第二、第三次空襲、一月二十四日十時十分敵艦載機約百機（英極東艦隊所屬）が来襲、第一製油所に爆弾百発を投下した。約十カ所から同時に発火し製油所は火の海と化した。

発電所、分解及び改質装置、原油蒸留装置が中破した。死傷者は日本人、現地人合わせて百人に達し

た。笠原隊長の適切な消火指導で翌二十四日、九時四五分完全に鎮火した。

同月二十九日十時三十分、敵艦載機約一二〇機が第二製油所に来襲、投下爆弾約百発、各製油施設、タンクは火に包まれ、そのホテリで五〇メートル以内には楯なしには接近できぬ状況になった。しかし、鋭意消火に努めた結果二〇八番タンク一基を残して日没までに鎮火させた。

製油施設の被害は意外に軽微であったが、日本人現地人合わせて約二百名の死傷者を出した。この中には戦闘指揮所の隣室で空襲中にも退避せず、作戦命令の電話交換に従事した川田女子雇員の痛ましい最後も含まれていた。五〇キロ爆弾の直撃を受けたので、三〇センチの防護壁も根本からフツ飛んでしまった。

二〇八番タンクの火勢はなかなか衰えず、翌々三十一日、二二時十分、発火後六〇時間を経て鎮火した。この時の消火方法は周囲に築堤し、水攻めで逐次火元を締め、最後にフォーマイトを二斉放射した

ものであった。

しかしながら全般の戦局はすべて絶望的になり、ルソン島はすでに米軍の占領下になった。三月中旬硫黄島玉砕、三月上旬シンガポールを出帆した船団が内地への石油還送の最後の便となった。

三月二十四日、光島丸と富士丸が一万六千キロロツトルの石油を積んで徳山に無事到着したのを最後に、南方と内地をつなぐ油の流れはプツツリ切れ、石油作戦の破局を迎えることになった。

三月三十一日、シンガポールの石油中継基地が徹底的な爆撃を受け完全に機能を停止、南方地域は完全に敵機の制空権内に入り石油の補給も、小型船によるいわゆる蟻輸送によらざるを得なくなった。

パレンバン製油所が、三回の本格的空襲を受けながら（パレンバン防空隊の活躍のもと）不屈の大和魂でダルマのように七転八起さし、処理能力の五〇パーセントを保持し得たことの要因は、①施設に対する防衛工事が完璧に近く実施されていた。②敵弾下で製油施設の緊急運転制御が適切に行われた。③

消火活動が敏速機敏かつ適切に行われた結果であろう。

防空隊が、十二センチ口径高射砲をもって高々度のB29超爆撃機三機撃墜したのを始め、約四十門の高射砲がパレンバンを守ったが、衆寡敵せず、製油所は火災を起こした。これをパレンバン石油人たちが生命をかけて復旧し守り続けた施設も、制空権下では搬出航路をスタスタに切断され、それを活用するすべもなくなり、昭和二十年三月を期しその運転を停めた。しかし、敵上陸に備えて最後まで燃料の補給を維持するために、ジャングル内に工場を分散した。……

このような状況下、防空隊高射砲連隊は馬來半島転進、ビルマ北上を命ぜられた。